



私達に求められていることは、 安全・安心に営み続けることができる 社会を国民に提供すること

第100代土木学会会長

小野 武彦

学会デビューは43歳。
そこでの
特別調査委員会が
人生の転機に

——新会長への就任おめでとうございませす。まず、会長と土木学会とのおつきあいの歴史についてお話しただけですか。

小野——私は1968(昭和43)年に大学を卒業し、清水建設に入社しました。次の年から広島支店に転勤となり、以来中国5県で17年間勤務しました。当初は現場でしたが、後半は地域に密着して技術を理解してもらった。めの技術営業と、受注した仕事の品質を保證する設計改善活動に取り組んできました。こうした経緯から、発注者や大学など官学の皆さんのお付き合いは社内でも多い方でした。

土木学会の会員になったのは、1985(昭和60)年40歳で東京に転勤になった後の1988(昭和63)年です。その後、公共工事の受発注システムに関する事件が

続き大きな社会問題となりました。そのような中、建設省が公共工事の発注に関して、技術力を重視した技術提案総合評価方式の採用を目指して、土木学会に研究を委託しました。そのときに、

東京大学の國島正彦先生を委員長とする特別調査委員会が立ち上がり、私も委員として参加することになりました。委員会は、海外事例調査と国内の総合評価の素案をつくるという二つのチームに分かれており、私は素案の枠組みをつくる主査を命ぜられました。検討期間も限られており、こんな面倒な仕組みを提案しては同業の仲間にも許されるのではなかつた。眠れない日が続きました。そのとき、委員会に加わっていた新潟県を地盤とする福田組の福田社長から、「今までやってこなかったことに取り組み、先鞭をつけるのですから、いいではないですか」と言われ、胸のつかえが取れました。福田さんの一言は今でも忘れられません。また、今まではずっと企業で仕事をしてきましたか

ら、分野の異なる産官学の皆さんで侃々諤々の議論ができたという経験は、私の人生の転機になりました。

安心安全で豊かな
国土をつくる。
そのための産官学連携
こそが学会の役割

——他の学会や関連する各種協会と比較した土木学会の特色は何だとお考えでしょうか。

小野——土木の最終の目標は、安全で安心な豊かな営みを続ける国土、社会をつくるということだと思います。その目標達成のためには、たとえば技術基準が必要ですが、技術基準をさまざまな角度から研究するのが学。それに基づいて政策を立案するのが官。そして、その基準を用いて実際のものをつくるのが産の役割ともいえます。この産官学が揃っているというのが土木学会の特徴です。しかし、社会の発展とともに、だんだん当初の志が薄れてきたのではないかと感ずるところもあります。

戦後の日本は、荒廃した国土の中で、均衡ある国土の再建を目指すという大きな目標がありました。土木技術者たちは、さまざまなプロジェクトに一心不乱に取り組み、今日の日本の国土を築き上げてきました。それが人も育てたのです。最近では『コンクリートから人へ』と言われますが、高度成長期に建設されたインフラのリニューアルや維持管理などを始め、必要なインフラの質を高めていなくてはなりません。3・11を受け、安全・安心に営み続けることができる社会をつくっていくためにも、国土政策を担う組織が日本の将来を俯瞰した政策ができるように、工学的見地や社会学的見地から日本をどうしていくのか。それこそが産官学の集まりである土木学会に求められているのではないのでしょうか。

小さなもの、地方からの発信を大切に

——土木学会誌の編集において、時代の転換期に直面する土木

と学会の志とは何かをもう一度考えながら、会員の方々が元氣の出るようなものにしていきたいと思っています。今後の学会誌に期待することはありますか。

小野——昨年の震災以降、さまざまな企画が編まれ、素晴らしい記事や論文が続きました。私もよく振り返って読むのですが、それらをどう土木界として統合していくのか。言い放しにせず、この問題についての議論を1年だけで終わらせてほしくないと思います。

また、日本では多くのプロジェクトが行われていますが、どうしても名前の通ったビッグプロジェクトに着目されがちです。しかし、小さくてもきらつと光るものがあります。小さなプロジェクトを担当する人がいるから、大きなプロジェクトもできるのです。ですから、そういうものにもぜひもつと焦点を当ててほしいと思います。

同じように、100周年記念事業への取組みなどについて3月から各支部を回り意見交換をしてきましたが、地方、地方で工夫

をして取り組んでいる素晴らしい活動があり、それが伝わっていないということも感じました。地方の独自性を尊重しながら、情報を共有化する。そういう役割も期待します。

「ものづくりは人づくり」をテーマに

小野——土木学会誌は、産官学で構成されている3万5000人あまりの技術者をつなぎ、気持ちを一つの方向に向けていくという役割も求められます。私も学会誌を通してこれから年5回私の考えを発信していきます。その中では、「ものづくりは人づくり」という共通テーマを各回の話題に織り込んでいきたいと考えています。ものづくりの対象は、研究成果をはじめ、それらを政策に反映した個々の構造物や、構造物で構成されるまち・地域も含まれます。そして、それらをつくるのは人、技術者ですから、人を育てていくことの大切さを訴えていきたいと思っています。



【聞き手】 佐々木 葉 土木学会誌編集委員長

【日 時】 2012年6月18日(月) 土木学会役員会議室

【執筆】 駒崎 文男 【撮影】 永田 まさお